
ナイトガーデン

彼方 ちさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナイトガーデン

【Nコード】

N9879X

【作者名】

彼方 ちさ

【あらすじ】

不思議なお花達の物語。

プロローグ

辺りが真つ暗な事に気付いた時、思わず少年は寝過ぎた、と感じた。

でもすぐに思い直した。朝が来たのなら、弟達や妹達が賑やかに騒ぎまくるから起きないはずが無いのだ。つまり、朝はまだ来ていない。彼が夜中に起きるなんて普段ならありえない事なのだけれど。

ねっとりとした汗ばむような湿気。無風。虫さえも鳴いていない。暑いには自信があると自負している少年も流石にダウンしてしまいそうな熱帯夜だ。ひよっとして、あまりの暑さに目が覚めたのかと考えた時、後に人の気配を感じた。

「…いらつしやいませ」

「いらつしやいませ」

そこには二人の人間がいた。一人は腰まであるストレートの黒髪をなびかせた、少年より背の高い女性。一体どこのお屋敷から来たのかと問いただしたくなるような使用人の服装、いわゆるメイド姿だ。真つ黒なワンピースから、覗く白いシャツが清潔感を漂わせる。髪も服も黒いので、白い肌で覆われた顔が余計目だつて見えた。一重の瞳がめんどくさそうにこちらを見つめている。

もう一人は、くりくりの瞳をした小さな男の子。服は黒と赤茶のチェック柄半ズボンにひらひらのシャツ。この暑いのにワッペン付のジャケットを羽織つて頭にはシルクハットのような帽子を斜めに被っている。まるで近代ヨーロッパからタイムスリップして来たかの様な格好だ。何故か熊のヌイグルミを抱いているのも気になる。

「…親子？」

少年の言葉に返ってきたのは女の凍るような視線だった。

「嫌だなあ、同じ年ですよ」

男の子は又イグルミの手を振りながら答えた。確かに、女の方は百歩譲って俺と同じくらいの子、まあ高校生くらいとしておこう。けれどこの小さいの。これはどう見ても小学校低学年だ。どこをどうみても同じ年には見えないのだが。

「ようこそ、ナイトガーデンへ！」

「……ようこそ」

二人の内一人は確実に歓迎などしてないような言い方だったが、そんな事はまあどうでもいい。さらにここがナイトなんかであるとか言っていたが、それすらもどうでも良かった。

少年は辺りを見回した。ここは家の前の道端だ。何時の間にか家を出たのか分からないが、どうやら夢遊病よろしく、パジャマのまま外に突っ立っているようだった。振り返って、ごくごく一般家庭の家ちよい下あたりの我がボロ屋を見上げる。すべての窓の電気は消えていた。どうやら自分が出て行ったことは家族に気づかれていないらしい。

「えーと、今何時くらいなのかな？俺、明日も朝早いんだけど。基本、早寝早起きだからさ」

「そんなー、若者がそんな事を言うてはダメですよー。夜はまだまだこれからじゃないですかあ」

「…ジジイめ」

横の女からぼそりと何か聞こえたが置いておこう。

「えーと、何で俺はここに居るのかなあ？」

「それはですね、」

コホン、と男の子が間をおく。その合間に、

「会いたがっている人がいるからだ」

と女が先に答えを言った。あつ、と男の子が先に答えを言われたことに対し、不満げな声をあげる。

「会いたがっているって、俺に？」

「そうですよー。誰だと思えます？」

男の子は気を取り直したのか、ニコニコとこちらに微笑みかけた。

「何代か前のばーちゃんの幽霊とか？」

「……色気ないですねえ、可愛い女の子とかの選択肢は無いんですか……」

「無い」

即答で答えた。悲しいけど考える余地すらない。幽霊の方があられる、と言い切れるくらい可能性がないのだ。

ふっと女の方が鼻で笑う。

「おい、今笑っただろ！」

少年は指を指して抗議した。

「今の時代、誰でもほいほい結婚できる訳じゃないんですよ？人の手で見合いというのも滅多に聞かなくなりましたし。やはり、若い内から動かないと」

男の子はのんびりとアドバイスをくれるが、大きなお世話も甚だしい。

「じゃあ何だ？ 可愛い女の子が『実は貴方のことが気になっていました』なんて今から言ってくれとでもいうのか？ この真夜中に？」

少年は手を組んで二人を睨みつけた。いい加減にしないと夜が明けてしまう。それまでになんかして眠りを確保したかったのだ。

少年が睨んでいるにも関わらず、全くこたえていない男の子は口元に手を当て、うふふつと悪戯っ子のように笑った。

「そのまさか、だったらどうします？」

「ちよつと待つてくださいよ〜」

男の子が、パタパタと少年を追いかけてくる。一方少年は『寝る』と言い残して、家の玄関に手をかけようとしていた。

こんな真夜中に告白？ 馬鹿馬鹿しい。

「どんな可愛い女の子が知りたくないんですか？」

その問いに、少年は勢いよく振り返って早口でまくし立てた。

「気にならないかと聞かれれば、気になる。けどな、こんな夜中に他人の睡眠を邪魔して会いに来る奴なんかろくな奴じゃない。だから俺は寝る。じゃあな」

「……選り好みできるような身分でもないだろうに」

女の方がいちいち失礼な言葉を投げかけてくる。

「いいんだよ、別に今すぐカノジョが欲しいとか思っていないから。今は恋愛より熟睡じゅくすい」

「あの……」

その時、今にも家に入りそうだった少年にむかって、か細い声が聞こえてきた。二人の意味不明な人物とは別の声。一体何処から聞こえてくるのかと見渡した少年が見たのは、横の家から隠れるようにこちらを覗く女の子だった。

まるで自身から光を放っているかのような色の白さに、色素の薄いふわふわの髪が映えている。家の扉に隠れている所為でよく見えないが、どうやらネグリジエを着ているらしかった。

「やっぱり……ご迷惑ですよね……」

少女は耳を澄まさないと聞き取れないくらいの小さい声で呟く。

「って、まさか？ この美少女が？」

少年は慌てて男の子の方を見たが、彼は俺には目もくれず少女の方へ駆け寄った。

「駄目ですよ！ 外に出るなんて無茶です！ 家の中で安静にしないで体に障りますよ。会いたがっていた彼は僕らがちゃんと案内しますから、ね」

「そうだぞ。心配するな。どうせ奴はお前と違って健康なんだから夜中に叩き起こしても気にする必要はない」

女性の方も少女を軽く叩いて家に入るよう誘導している。少年に対する時とは違い、相変わらずぶっきらぼうだが行動には優しさが見られた。

「……え、なにコレ。俺、なんか悪者？」

お願い、誰か説明してーって、と少年は呟く。しかし、そう言いながらもこの雰囲気では理由は想像できた。要するに、彼女は体が弱いのだろう。健康少年の睡眠なんかより彼女の体調に合わせるのが得策だと考えるのは当然の行動だといえた。

どうにかして少女を家の中に帰した二人はそろって無言のまま少年の方を見つめる。その目には非難の念が込められていた。耐え切れなくなって、少年は力なく俯く。

「……どこへなりと、連れて行って下さい」

もう、睡眠は諦めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9879x/>

ナイトガーデン

2011年10月28日10時17分発行